The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ミラノ・ブレラ国立図書館蔵『日本のカテキズモ』について
Author(s)	岸本, 恵実
Citation	日本語・日本文化. 2003, 29, p. 161-169
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11794
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

＜研究報告＞

ミラノ・ブレラ国立図書館蔵『日本のカテキズモ』について

岸本　恵実

1. はじめに

イエズス会巡察師を務めたアレッサンドロ・ヴァリニャーノ Alexandro Valignano, S.J.（1537-1606）の著書『日本のカテキズモ』（1586年リスボン刊）の諸本は、これまでポルトガルにある、マヌエル王家文庫 S.M. El Rei Manuel 蔵本（以下「王家文庫本」と略記する）・リスボン国立図書館 Biblioteca Nacional de Lisboa 蔵本（「リスボン図書館本」）・パッソス・マヌエル中学校 Liceu de Passos Manuel 蔵本（「中学校本」）の3本の存在が知られていたが、今回新たに、ミラノにあるブレラ国立図書館 Biblioteca Nazionale Braidense 蔵本（「ブレラ本」）の存在が確認された。本稿は、2002年7月に行った調査に基づき、このブレラ本について報告を行うものである。

2.『日本のカテキズモ』について

『日本のカテキズモ』は、リスボンで出版されたものであるため普通キリシタン版（1590年日本に将来された活字印刷機による、日本イエズス会の出版物）には含められないが、日本布教のために印刷された最初の書物であること、日本教会に大きな改革を行った巡察師自身の著作であること、内容が日本の既成宗教の分析・批判を含んでいることなどから、日本布教史上重要な書とみなされてきた。

『日本のカテキズモ』の正式な書名は、CATECHISMVS CHRISTIANAE FIDEI, IN QVO VERITAS nostrae religionis ostenditur, & sectae Iaponenses confutantur, editus à Patre Alexandro Valignano societatis IESV.（キリスト教信仰のカテキズモ。ここでは私たちの宗教の真理が示され、日本の諸宗派が論駁されている。イエズス会士ア

レッサンドロ・ヴァリニャーノによって編纂された。）であるが、柱に Catechismus Iaponensis Christianae fidei（キリスト教信仰の日本のカテキズモ）とあることから、日本では一般に『日本のカテキズモ』と呼ばれている。本文は全てラテン語で書かれており、二巻（第一巻 76 葉・第二巻 24 葉）からなる一冊である。これまでに、『Classica Japonica 第 2 次きりしたん資料篇』(1972) にパッソス・マヌエル中学校本の影印と解説があり、邦訳は家入訳（1969）がある。後者は邦訳だけでなく、諸本の比較研究や活字について考察した富永（1966）なども収めており、本報告作成にあたり参照した点が多い。

ヴァリニャーノは東インド管区の巡察師として日本イエズス会に大きな改革を行い、フランシスコ・サヴィエル以来の日本布教の功労者というべき人物である。ヴァリニャーノの行った改革の特色の一つは、日本の事情に合わせた布教という点にあるが、日本人イルマンらの教科書として編まれ、日本の諸宗教を批判しながらキリスト教の真理を説いた『日本のカテキズモ』も、この改革の流れから生まれたものといえる。本書の内容については、家入訳(1969)及び井手(1995)を見られたい。

また、この書が刊本として印刷される以前、1580 年から 1581 年にかけて、ヴァリニャーノが豊後の臼杵ノビシヤド（修練院）でこの『日本のカテキズモ』の内容を講じたという。刊本上巻の半分に満たない分量であるが、講義の内容を漢字カナ交じりの日本語文で書写した文書が、ポルトガルのエヴォラ図書館に伝わっていた日本の古屏風に下張りされていた古文書、いわゆるエヴォラ屏風文書の一部として伝存している[1)]。

3. ブレラ本『日本のカテキズモ』

3.1　ブレラ国立図書館について

ブレラ図書館は 18 世紀の啓蒙主義を背景に設立された、イタリア有数の公共図書館である。ミラノの中心であるドゥオモ（司教座聖堂）にほど近い、静かな街並みの一角にあり、イタリア絵画で有名なブレラ美術館 Pinacoteca di Brera、ブレラ美術学校 Accademia di Brera と建物を共有している。なお、Braidense 及び Brera という言葉は、ロンバルド語で郊外の草地を意味するBraidaに由来しているという。

この図書館の歴史について詳しい Baretta（1993）によると、1706 年以来オース

トリアの支配下に置かれていたミラノでは、1770年マリア・テレジアの命により、ミラノ上院議長を勤めたカルロ・ペルトゥザーティ伯爵（1674-1755）の蔵書をもとに、街の中心の適当な場所に一般に開放された図書館を作ることが決められた。ミラノには知識を得たいと願う人々が自由に利用できる図書館がないこと、すでにミラノにあったアンブロジアーナ図書館は、写本は多いが刊本が少ないということが、新たな図書館設立の理由であった。イエズス会解散後の1773年、その図書館にふさわしい場所として選ばれたのが、ブレラの地にあったイエズス会の学校の建物であった。ここは13世紀ウミリアート会の修道院があったところで、会の解散後1572年以来、イエズス会が使うようになっていた場所である。

図書館にはイエズス会の蔵書として、ブレラの学校のものだけでなく、やはりミラノにあったサン・フェデーレ、サン・ジロラモの修道院にあったものも収められ、ペルトゥザーティ伯の旧蔵書とともに図書館の蔵書の核となった。おそらく『日本のカテキズモ』も、もともとイエズス会の蔵書だったものだろう。

ブレラ図書館には1890年以前の刊本について手書きの目録があり、著者名か件名で引くことができる。その第120巻 Valignanus, Alexander Soc. Jesu の項に、*Cathechismus Christianae Fidei ... 1586.* の書名があったことが、今回の発見のきっかけとなった。

また、同目録第66巻の Japonia の項には、*De Missione Legatorum Japonensium ...*（『日本遣欧使節対話録』）の書名も見える。この書は、ヴァリニャーノが天正遣欧使節の見聞録を対話形式で記し、サンデ Duarte de Sande, S.J. がラテン語に訳したもので、1590年にマカオで出版された。残念なことにブレラ本は、目録では Non rinvenuto（不明）となっており、所在は確認できなかったが、この本もやはり、もともとイエズス会の蔵書であった可能性が高い。

このほかブレラ図書館には、天正遣欧使節に関するヨーロッパ側の出版物目録 Boscaro（1973）に記載されているように、クレモナ、ミラノなどイタリア各地で出版された天正使節関係の書物が多く収められている。

3.2　ブレラ本について

ここではブレラ本『日本のカテキズモ』の書誌を、他の3本と異なる点を中心

に紹介する。

3.2.1　書誌

ブレラ本（所蔵番号 G/Ⅱ/7）は縦 19.1cm×横 13.3cm の一冊で、上下巻ともそろった完本である。濃い茶色の革表紙の表・裏ともに、大小二重の長方形の押模様があり、中央部に草木の押模様がある。表表紙の左上方には、旧番号と思われる L/Ⅱ/29 のスタンプが押されたシールが付されている。背の上部に書名らしきものを記した紙が貼ってあった跡があるが、ほとんど失われており、ano/Aleuo のような文字をかろうじて読みとることができる。背の下部には G/Ⅱ/7 の所蔵番号シールが貼られている。小口は三方とも朱・青の散らし模様がある。表の見返しには、ブレラ図書館の二種類の蔵書票が付されており、第一巻の表題紙に同図書館の蔵書印がある。

3.2.1.1　他本との比較

富永（1966）によると、これまでに紹介されていた 3 本、王家文庫本・リスボン図書館本・中学校本のうち、中学校本だけが他の 2 本と異なる箇所がいくつかあり、後刷りの完成本ではないかという。相違点は次のようにまとめられる。

① 出版允許状の有無

② 第一巻 4 丁裏までの活字の違い

③ 第一巻の手書きによる誤字の訂正

④ 第二巻表題紙の活字の配置

⑤ 第二巻巻末の LAVS DEO の文字の有無

①から⑤について、ブレラ本の場合、ほぼ全ての点で王家文庫本・リスボン図書館本と同様であり、さらに富永（1966）に掲載されている写真を見ると、表題紙や活字の様子が中学校本よりも他の 2 本に近いため、ブレラ本もやはり中学校本より前に刷られた版と考えられる。

ただし、ブレラ本は②で指摘されている 48 の活字の違いのうち、1 語についてだけ、王家文庫本・リスボン図書館本とも中学校本とも異なっている。

（3 丁裏 5 行目）

王家文庫本・リスボン図書館本	vastiſſimo
中学校本	vaſtißimo
ブレラ本	vastißimo

上のように、ブレラ本は、st の部分が王家文庫本・リスボン図書館本と等しく、ß の部分は中学校本と等しいので、この1例についてだけいえば、ブレラ本は二つの系統の間に立っているといえる。

3.2.1.2　二種類の書き入れについて

ブレラ本について注目すべき点は、表表紙の遊び紙・表題紙（第一巻）と本文に書き入れが多いことである。この書き入れは黒インクを用いペンで書かれているが、大きく二種類に分けることができる。一つは表題紙の Casa de Ternate という文字であり、もう一つは遊び紙・表題紙・本文に見られる注記である。どちらも、いつ誰が書いたものであるかは不明である。

まず、表題紙の Casa de Ternate（テルナテの修道院）という文字についてであるが、これはイエズス会の紋章である IHS の図柄を間に挟んで書かれており、他の書き入れ注記とは明らかに筆跡が異なっている。

インドネシア東部に位置するテルナテ島は、丁字などの香料の産地として、マルク諸島の中でも古くから貿易が行われていた。大航海時代にはイスラム教徒の王が治めるテルナテ王国があり、この地域の香料をめぐってポルトガルやスペイン、のちにはオランダが参入して争った歴史がある。

大航海時代にマルク諸島で活動した修道会はイエズス会、ドミニコ会、アウグスチヌス会、フランシスコ会があるが、特にテルナテ島については1546年フランシスコ・サヴィエルが滞在して以来イエズス会が中心的存在であり、イエズス会士はテルナテ島をこの地域の拠点として、ポルトガルやスペインの勢力事情に大きく左右されながら活動を続けた。おそらくブレラ本は、一時期イエズス会のテルナテ修道院に蔵されていたのだろう[2)]。

なお、井手（1995:21）などによると、『日本のカテキズモ』は1616年と1633年のマカオ・イエズス会蔵書目録にそれぞれ8部・2部あったと記載されているとのことであり、このことからも、『日本のカテキズモ』が出版地のリスボンから

アジア方面に運ばれていたことが確認できる。

次に、遊び紙・表題紙・本文に見られる書き入れについてである。これはこの本を読んだ者が、著者ヴァリニャーノや本の内容などについて書き入れたものであるが、文字が小さく走り書きであるため、残念ながら正確な解読は難しい。ほとんどの書き入れが第一巻にあり、また第一巻の内容に関係するものと目される。第二巻の書き入れは下線のみである。

表表紙の遊び紙と表題紙の書き入れは、10ほどの事項がそれぞれ1～4行程度のラテン文で書かれており、参照すべき丁数・ページ数が示されているものもある。本文中の書き入れは数十箇所にわたり、参照丁数や下線などが書き入れられている。

例えば、以下のような書き入れが見られる。（... は解読できない部分）

（遊び紙表）
postquam disputauit auctor ... religionem
et ... Japon ..... de
veritate et excellentia religionis christianae
fol. 50. l. -

ラテン語文の意味はおおよそ「著者は日本の宗教を論じたあとで、キリスト教の真理と優位を述べている。50丁裏」のような内容であると推測される。このメモの通り、第一巻の50丁表までは日本の諸宗教の批判であり、50丁裏に始まる第六講からは、キリスト教こそが真の宗教であることを説く内容になっている。

（遊び紙表）
multis argumentis, ... doctissimis, ...
auctor ... humanae naturam ...
spiritualem, fol. 25 -

これも本文の内容に関するメモとみられ、「著者は人間の精神について多く論じている。25丁」という意味を含んでいるかと思われる。第一巻の25丁は第三講

の一部に当たるが、この講では人間の魂について論じられ、ある仏教宗派の「人間の心は第一根元者と同一である」という考え方が批判されたあと、25丁表から第三講の終わりである34丁表まで、人間の精神についての真実が論じられている。

（第一巻6丁裏）

3行目	Primumに下線を引く。
3行目左欄外	fol. 9- の書き入れ。
5～7行目	prin（cipium）からintelligensまで下線を引く。
11行目	Secũdumに下線を引く。
11行目左欄外	fol. 18- の書き入れ。
13～14行目	vtからidemまで下線を引く。
15行目	Tertiumに下線を引く。
15行目左欄外	fol. 24- の書き入れ。
22行目	Quartumに下線を引く。

この第一巻6丁裏では日本人のCami（神）、Fotoque（仏）の教えを四点にまとめており、第一のことPrimum、第二のことSecũdum、第三のことTertiumは、それぞれの書き入れが示している第一巻9丁、18丁、24丁の内容と関係がある。6丁裏の第一の点で述べられる「日本人のいう万物の第一根元者は無念無想である」ということと、9丁表の「キリスト教の宇宙の創造者は万物についての完全な知識を有する」という記述は対応しているようである。また、6丁裏第二点めの「日本人のいう万物の第一根元者は個々のものの中にある」という教えは、18丁表以降で虚偽であるとして否定されているし、第三点めの「人間の一番奥底の心は万物の第一根元者と同一である」という教えも、24丁表から始まる第三講で否定されている。また、18丁表の4行目と24丁目表7行目には、欄外にfol. 6. 1. と書かれており、やはり6丁裏と対応していることを示している。

4. 終わりに

このブレラ本は、従来ポルトガルでの所在のみが知られていた『日本のカテキ

ズモ』が、はじめてイタリアで発見されたという点からだけでなく、遊び紙や本文などに内容に関する書き入れが多いこと、テルナテ島の修道院にあったとみられることからも注目されるものである。

註

1) 近年の研究として、影印も収めた伊藤編（2000）がある。『日本のカテキズモ』の箇所の翻刻には、海老沢他編著（1993）所収のものがある。
2) Jacobs（1974:57*）（1984:14*-15*）によると、テルナテにあったポルトガルの要塞が1574年テルナテ人の攻撃によって陥落してから、イエズス会士たちは活動できなくなったが、スペインがテルナテを奪回した1606年以降、活動が再開されたという。『日本のカテキズモ』は1586年の出版であるから、ブレラ本がイエズス会のテルナテ修道院にあったとすれば1606年以降のことであろう。

参考文献

井手勝美（1995）『キリシタン思想史研究序説』、ぺりかん社、東京
伊藤玄二郎編（2000）『エヴォラ屏風の世界』、かまくら春秋社、鎌倉
ヴァリニャーノ著・家入敏光編訳（1969）『日本のカテキズモ』、天理図書館、奈良
海老沢有道・井手勝美・岸野久編著（1993）『キリシタン教理書』、教文館、東京
天理図書館編集解説（1972）『Classica Japonica 第2次きりしたん資料篇』、雄松堂書店、東京
富永牧太（1966）「ヴァリニャーノ『日本傳道のカテキズモ』の書誌――欧文印刷文字篇二十――」、（天理図書館）『ビブリア』34、奈良（家入訳（1969）に再収）
Baretta, Giuseppe（1993）*Tra i fondi della Biblioteca Braidense*, Franco Sciardelli, Milano
Boscaro, Adriana（1973）*Sixteenth century European printed works on the first Japanese mission to Europe*, E. J. Brill, Leiden
Jacobs, Hubert（1974, 1980, 1984）*Documenta Malucensia*, vol. I（1542-1577）, II（1577-1606）, III（1606-1682）, Jesuit Historical Institute, Rome

本稿は、平成14年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「東アジア出版文化の研究」の成果の一部である。

〈キーワード〉『日本のカテキズモ』，ヴァリニャーノ，キリシタン版

The Copy of *Catechismus Iaponensis* in Biblioteca Nazionale Braidense, Milan

Emi KISHIMOTO

A new copy of *Catechismus Iaponensis Christianae Fidei*, written by Alexandro Valignano, S.J. (1537-1606) and published in Lisbon in 1586, was found recently in the Biblioteca Nazionale Braidense library in Milan. Three other copies of the book were known previously: one in the Portuguese Royal Library *S. M. El Rei Manuel*, one in Biblioteca Nacional de Lisboa and one in Liceu de Passos Manuel.

The Biblioteca Nazionale Braidense building functioned as a Jesuit college and probably the recently discovered copy of the *Catechismus* was from the old Jesuits' library. According to a note on the title page, in former days the copy was kept for a period of time in Casa de Ternate in Maluku (Indonesia).

The new copy seems to be of the same group as those kept in the Royal Library of S. M. El Rei Manuel and Biblioteca Nacional de Lisboa, as all of them bear no printing licence and present some differences from the one of Liceu de Passos Manuel, which is thought to be an ulterior complete printing.

The copy is worth attention not only from the point that it is the first one found elsewhere than Portugal, but also because it bears many notes with regard to the content and to the author, which can be seen on the title page, flyleaves and text pages.